

## 教職員、院生学生、生協職員にわかってほしいこと

大学生協連会長理事 庄司興吉

### 1 前回理事会以後

非常に暑かった夏が終わりました。私のほうも暑いなか、前回理事会からいろいろなことがありました。7月25日から韓国に行き、新しい生協法ができたということもあり、いくつかの大学生協と交流をしてきました。8月7日からPCカンファレンスが仙台であり、8月23日から地域センターの会長会議が盛岡でありました。その後9月4・5日には理事長・専務理事セミナーがあり、9月下旬から10月上旬にかけては、ドイツのベルリンでDSWとの意見交流を行い、その後、イタリアのパドヴァでおこなわれたヨーロッパ学生支援会議で、各国の諸団体との交流をおこなってきました。

帰ってきて、10月9日には生協総研の生協学をめぐるコロキウムがおこなわれ、私も大学生協での経験をふまえた報告をし、議論をしました。相当に忙しく暑いなかをやってきて、自分ではまだ元気だと思っていますが、だんだんボンコツ化していることは争えないので、いつどうなるかわかりません。あとのことを今から考えておかなければいけないと思い、教職員、院生学生諸君、生協職員に今までもいろいろと話してきていますが、今日もご出席の皆さんにあらためてわかってほしいことを話したいと思います。

### 2 前3回理事会での挨拶

いろいろ忙しかったために、3回分くらいの理事会での挨拶の整理が遅れていました。それらを、ヨーロッパに行く飛行機のなかで2つ半直し、最後の一つをごく最近仕上げて、お手元の資料にしています。3月には「人間の危機に対処する協同」、5月には「日本のシティズン社会と大学生協の役割」、7月には「大学生協は協同組合の媒介者になれるか？」について話しました。これらを見ていただくと、私が大学生協の会長理事を務めながらどんなことを考えているか、お分かりいただけると思います。

これらは会長理事のホームページに載せていますが、あらためて資料としても出させていただいたわけです。それらをつうじて私がいおうとしているポイントは、私がこれまで社会学者としてやってきた、社会はどういう展開をしてきてこれからどうなるのかという理論と、他方で大学生協に関わってきて、生協あるいは協同組合について感じてきたことが、だいたいクロスするようになってきたということです。

それで今日はそのことを、最近執筆した二つの文章でご理解いただきたいと思います。私の本格的な議論をいきなり出すと、短くという制約のなかで書いているものですから、生態学的視点が欠けているなどという意見が出てきかねないと思い、短い文章を先に出します。大学生協が名古屋でおこなわれるCOP10に書評誌を出して貢献したいということで、序文を書いてもらえないかといわれて書いたものです。こんな序文は形式的なものだからと思われるかもしれませんが、私はこういう短いものでも形式的に簡単には書かないで、一つひとつ考えて自分の考えを明瞭に打ち出します。まずそれから。

### 3 COOP（生協）だからこそ COP10 に貢献しよう！

生き物は多様であり、さまざまな形でつながりあっている。地球はこうした生態系を数十億年もかけてつくりあげてきた。私たちはこうした生態系のなかでしか生きることができない。人間は地球生態系の頂点にあつて、採集や漁労や狩猟ばかりでなく栽培や養殖や牧畜を拡大しながら、数知れない植物や動物を食い散らかして生きてきた。

そのうえで、とくに大工業を展開するようになり、工業化と都市化を地球全域に広めるようになってからは、食用のためばかりでないもろもろの欲望のために、植物や動物の住み処を無神経に破壊し、生物多様性まで危機にさらすようになってきた。人間は自らの生き様に謙虚になり、虚勢や暴力のために破壊し続けてきているさまざまな生物とその住み処に、思いをいたさなければならない。そうしなければ、自分自身生きてはいけなくなるからである。

この数世紀、この地球の表面を変えてきたのは、都市に育ち、社会全体に、そして地球全体へと広がった市民たちであった。とりわけその先頭を切った金持ち市民たち（ブルジョワ）が、工業と産業と都市づくりの事業を全世界に広め、生物多様性を支える地球環境を破壊し続けてきた。なかでも、大金持ち市民たち（グラン・ブルジョワ）は、諸物交換の手段であったはずの貨幣のやりとりをゲーム化し、世界経済を混乱させて、環境破壊を激化させ続けている。

しかし、この過程で、金持ちでない普通の市民たち（オーディナリ・シティズン）の民主主義も世界に広まった。世界のシティズンたちが、自分たちの国家に要求して、大金持ち市民たちのマネー・ゲームを取り締まるとともに、彼らの事業による地球環境破壊を止めさせようとしている。同時に普通の市民たちは、こうした事態を変えるため、自分たちで出資して民主的なやり方で事業を展開し、地球上の生き物に感謝しながら、必要な食糧その他を安全な形で確保しようとしてきている。

これが生協であり、市民たちの生活協同組合 COOP が生物多様性条約の締約国会議 COP10 を熱心に支援するのは、こういう理由からなのである。大学生協のみならず全国の生協および協同組合の組合員および関係者に、この機会に、生物多様性と地球環境の大切さと生協活動および協同組合活動との深いつながりについて、考えて欲しい。

こういう文章を、COP10 の資料集の序文に載せました。その後、生協総研が出している『生活協同組合研究』に巻頭言を書いて欲しいといわれ、次のような文章を書きました。これは昨日できたばかりですが、つぎに紹介させていただきます。

### 4 人類史展開の現段階と大学生協の大きな役割

この十数年、大学生協に関わり、そのあり方・存在意義について考え続けてきた。他方、私の専門である社会についても研究を集大成しなければと思い、社会の展開をめぐる基本的な理論について考えてきたが、その塑像もほぼできてきた。そして、両者がクロスしてきた。

ビッグバンから宇宙が展開しはじめて 137 億年、太陽系が誕生して 46 億年、地球上に生命が生まれて 38 億年、生物進化のあげく人類の祖先が現れて 500 万年、現生人類ホモ・サピエンスが活動しはじめて 40～25 万年、そしてヒトが農耕をおぼえて文明をつくりは

じめてから1万年。それから数千年のあいだ、人類はまず、なんらかの超越者を想定して、その化身や代行者などとみられる身体を措定し、それへの崇拜をつうじて社会を統合するシステムをつくりだした。帝国である。

帝国は宗教を背景にして国家をつくり、農業中心の経済と伸びようとする市場を統制して支配を維持するため、拠点として都市をつくった。都市に人が集まってき、都市の民すなわち市民の原型ができるが、強大な帝国の権力のまえに最初は自治どころではない。古代ギリシアのような、帝国の支配網から漏れ出たところに都市国家が生まれ、民主主義の萌芽が生まれるが、これらは広い範囲には伝播しなかった。

神聖ローマ帝国に象徴されるような弱い帝国しかできなかったヨーロッパで、11-2世紀から自治都市が成長しはじめ、それらのなかで育った市民たちが17世紀いこう市民革命を展開し、市民社会を世界中に広げて、21世紀の前半までにあらゆる帝国を駆逐してしまう。市民社会は、宗教に代わって科学技術を用い始めた市民たちが、国家を自らの民主主義で制御しつつ、工業をはじめとする産業を展開して生産力を飛躍的に高め、それによって世界中を都市化していくシステムであった。

この世界システムづくりを当初からリードしてきたのは、大金持ち市民すなわちブルジュワである。彼らがつくりだした企業がやがて法人化してコーポレーションとなり、20世紀になると貨幣を自在に扱ってさらに大金持ちとなる方法、すなわち金融資本から現代的金融センターへの道を開いてきた。実体経済から遊離した仮想経済を膨らませ、現代世界の経済を混乱させているのはこの金融センターである。

しかし、こうした大金持ち市民たちにたいして、19世紀前半のイギリスから労働者たちが反撃をはじめ、一人一票制の民主主義を要求して、ブルジュワの社会を、主権者としての市民すなわちシティズンの社会に変え始めた。この傾向は、20世紀に入って、先進諸本主義諸国ばかりでなく、植民地状態から独立した諸国から、さらには国家社会主義で失敗した諸国にまで広がりをはじめ、21世紀の現在ではもはや揺るがしえようのない世界の趨勢となっている。

この過程で同時に、労働者たちは19世紀半ばから、自ら出資して民主的に運営する協同組合の事業を始め、それは消費物資購入から農業、漁業、その他弱小産業やそれらへの金融業にまで広がり、1895年以降は国際協同組合同盟ICAを展開して、今や世界経済に無視しえない力を持つようになっている。だから、広義の労働者から成長した現代の普遍的市民すなわちシティズンは、現代世界経済の混乱にあってもひるむ必要などないのである。シティズンたちは、自分たちの政府をできるかぎり民主化しつつ、それら政府の国際的連合体で金融センターや大金持ち市民たちの事業を規制し、協同組合から各種NPOなどに展開してきた自分たちの民主的事業の世界経済における比重を、たえまなく高めていけばよいのだ。

ところで日本で、この協同組合の一つの源流を大学の中で伸ばし続けてきたのは、大学生協ではなかったのか。世界有数の協同組合連合に成長した日生協も、大学生協の貢献がなければ今日のように伸びられなかったかもしれない。グローバル化のなかで世界のどこでも通用する21世紀型市民の養成を迫られている大学にあって、大学生協は、過去の、必ずしも意図したものではなかったかもしれない大きな歴史的役割を新たに認識しなおしつつ、今や地球市民の養成にあらためて大きな役割を果たす覚悟をしなければならないの

である。

## 5 教職員の皆さんへ

これらをふまえて、大学生協とは何かということ、あらためて生協に関係し貢献していただいている教職員の皆さんに、考えていただきたいと思います。生協が、私のいうように、オーディナリ・シティズンの事業であるという捉え方は意外と少ないということが、生協総研のコローキアムなどでもわかりました。事業であると思っておらず、誰の事業で、どういう意味をもっているのかという認識は必ずしもはっきりしていないのです。先生方にも、そういうことをぜひご理解いただきたいと思います。

## 6 院生・学生諸君へ

大学生協に関わって非常に熱心に活動してくれている院生・学生諸君には、自分たちがやってきている活動の意味をもっとわかってほしいと思います。大学生協の源流は戦前にもさかのぼり、戦後は急速に伸びてきたのですが、この過程で生協は市民の事業であるというような意識はあまりありませんでした。むしろ、学生運動と平行して、社会を変革していく運動の一環であるという捉え方がある時期までは主流でした。しかし、そういう階級闘争史観に立脚したとらえ方だけではとても駄目だということが、20世紀の最後の四半世紀に入るとしだいに分かってきたのです。

それをふまえて、どういうふうの世界史をとらえ直し、日本史をとらえ直して、そのなかに大学生協をどう位置づけていくかです。考えてみると大学生協は、自分で考えていたよりは、はるかに大事なことをしてきたのです。それは市民の事業としての協同組合事業の源流になってきている。ある意味ではそこから、日本における生活協同組合運動も生まれている。戦後の日本では他方で、農業、漁業、中小零細企業などの分野にも協同組が広がりましたが、これらも市民の事業などという意識は持たないできている。そういう大きな流れのなかで、協同組合および生協を位置づけ、新しく位置づけなおして、新たに展開していかなければならない。その先頭に立たなくてはならないのが大学生協なのです。それを、院生・学生諸君にはぜひ分かっていただきたい。

## 7 生協職員諸氏に

最後に生協職員諸氏にたいしてですが、私も各地でいろいろな生協教職員に会ってきます。皆まじめに事業としての生協について考え、赤字を出したら大変だ、赤字を克服できないのは大変だという意識で、一生懸命やってきている。そういう実務的な面で能力を発揮して頑張っていただいているのは、たいへんありがたいことです。

ですからそのうえで、自分のやっていることの意味をいまだ少し考えていただけないか、もう少し広い歴史的な流れや社会の展開の方向のなかで、大学生協がどういう意味をもっているのか、他の協同組合との関係ではどういう役割を果たしていかなければならないのか、などを考えていただけないかと思うのです。2012年が国連によって国際協同組合年と定められ、日本でも実行委員会ができていくわけですが、そのことも含めて、生協がどういう役割を果たしていかなければならないのかを考え、大学生協の意味づけができるようになると、生協職員諸氏が抱えている大変さの受け止め方も、かなり変わってくるの

ではないかと思えます。

そういうことをぜひ理解していただきたいのです。私のごとき者がいつ抜け出しても大学生協がずっと発展するように、ぜひ皆さんに積極的活動をお願いしたいと思います。以上が、今日の私の挨拶です。